

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座八の十四の三松本ビル
電話(五四二)五四七-一 番

清元協会の

港区南青山二の十七の十三の一〇三
電話(四〇二)〇二四〇-番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館
電話(五七二)〇二一-六 番

新内協会の

品川区旗の台六の二十七の二
電話(七八二)三九五-五 番

常磐津協会の

港区南麻布五の三の四十六
電話(四四四)三〇二〇-番

社団法人 長唄協会

中央区銀座六の十二の二の四〇二
電話(五七二)八七五-六 番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一-六 番

(五十音順)

後援 東京都

昭和五十六年三月八日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演
第二部 四時半開演 八時終演

'81 都民芸術フェスティバル

第十一回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'81都民芸術フェスティバル参加公演(昭和55年度東京都助成公演)

種目	公 演 内 容	会 場	期 日	入場料金	問 合 せ 先
オペラ	田中 均「虎月傳」	モーツァルト・サロン(新宿)	1月9日～11日	3,000・2,000円	創作オペラ協会 (379)3756
	ヴェルディ「ドン・カルロ」	東京文化会館 大ホール	1月31日～ 2月2日	7,500～1,000	二期会 (370)6441
	ベルリニー「カプレーティ家とモンテッキ家」 -ロメオとジュリエット-	東京文化会館 大ホール	3月14日～16日	7,000～1,000	藤原歌劇団 (371)5384
	三木 稔「春琴抄」	東京文化会館 大ホール	3月21日・23日	6,000～1,000	日本オペラ協会 (403)5516
室内合奏 オーケストラ ボクセル ジャズ	第12回都民のための室内合奏 古典音楽協会(室内合奏)	東京文化会館 小ホール	2月4日	1,300	日本演奏連盟 (437)6837
	東響、都響、N響、東フィル、読響	東京文化会館 大ホール	2月17日～ 3月9日	1,500・1,300	
	松本英彦クワルテット、笈田敏夫Vo、 金子晴美Vo、高橋達也と東京ユニオン	郵便貯金ホール	2月25日	1,500	
邦楽	第11回 邦楽演奏会	第一生命ホール	3月8日	1,500	邦楽連合会 (571)0216
新劇	W・シェイクスピア「ロミオとジュリエット」	俳優座劇場	1月23日～27日	1,500	シェイクスピア・シアター (649)9889 新劇団協議会 (341)8151
	W・シェイクスピア「ハムレット」	東横劇場	2月6日～22日	3,800～2,000	文学座(351)7265 新劇団協議会 (341)8151
	W・シェイクスピア「まちがいつづき」	紀伊国屋ホール	3月9日～15日	2,500・1,500	円企画(363)7735 新劇団協議会 (341)8151
児童劇	(人形劇) L・F・バウム「オズの魔法つかい」	荒川区民会館 外3	*12月21日～26日 2月7日～15日	1,500・1,300	人形劇団ひとみ座 044(777)2222
	(舞台劇) 筒井敏介「ちゃんめら子平次」	日本教育会館	3月21日～31日	2,000・1,800	劇団風の子 (466)8338
バレエ	アダン「海 賊」	東京文化会館 大ホール 外1	2月1日～7日	3,000～1,200	日本バレエ協会 (462)5524
	「ラ・バヤデール」「オラショ」 「緑のテーブル」「エチュード」	東京文化会館 大ホール	2月14日・15日	5,000～2,000	東京バレエ協議会 (723)2356
現代舞踊	「ねぶた」「トネリコの枝」「サーカス」	東京文化会館 大ホール	3月4日・5日	2,500～1,200	現代舞踊協会 (400)4544
日本舞踊	第24回 日本舞踊協会公演	国立劇場 大劇場	2月17日～19日	4,000	日本舞踊協会 (533)6455
能	都 民 能	東京文化会館 大ホール	1月24日	1,000	能 楽 協 会 (574)6441
	翁 付 式 能	観世能楽堂	2月15日	5,000～2,500	
民俗芸能	第12回 東京都民俗芸能大会	中野公会堂 外1	2月14日・15日	無料招待	東京都民俗芸能大会 実行委員会 (894)6923
寄席芸能	第11回 都民寄席	立川社会教育 会館 外6	2月12日～20日	無料招待	都民寄席実行委員会 0423(81)5534

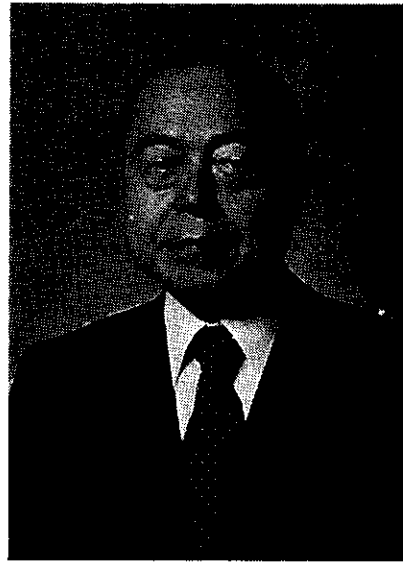
◎無料招待有

*'81都民芸術フェスティバル期間外の助成公演

全体についてのお問合せは東京都教育庁社会教育部文化課 TEL(212)5111 内44-531

邦楽演奏会に寄せて

東京都知事
鈴木俊一



都民芸術フェスティバルは、昭和四十三年度に発足以来、本年度で十三回目を迎えることになりました。このフェスティバルは、東京都が芸術文化団体のおこなう公演にたいして、その費用の一部を補助し、「優れた芸術を、安い料金で、多くの都民の方々に鑑賞していただく」という目的で、毎年一月から三月にかけて開催してまいりました。いまでは、公演の種目も当初の六種目から十二種目にまで拡大され、都民のための芸術の一大祭典にまで、発展してまいりました。

現在、私は、都民が安心していきいきと暮らせる、ふるさと東京をめざして、マイタウン東京構想の実現に努力いたしております。都民がいきいきと暮らせるまちを創造するためには、さまざまな施策を総合的に実施していくことが必要です。とりわけ、都民に親しんでいただけ、心の豊かさややすらぎをもたらす芸術文化の振興は、きわめて重要な課題であると思えます。

本年度も、この都民芸術フェスティバルが、都民のみなさまにとって楽しい、実り多い催しになれば、さ

いわいで、フェスティバルに参加し、大きな一翼をになってくださった邦楽連合会の、力一杯の活躍を期待しております。

第一部 番組 (十二時半開演)

一、萩江八

島

同 同 唄
萩江江 萩江江
加 い ち
厨 と か
子

同 同 三味線
萩萩萩
江江江
千みさ
代なわ

二、義太夫 沼津里の段
伊賀越道中双六

平作 竹本 土佐廣
十兵衛 竹本 素八
およね 竹本 綾之助
安兵衛 豊澤 幸佳

三味線 豊澤 仙廣
ツレ弾 豊澤 幸治

三、箏曲乱

輪

舌 (みだれ)

箏平調子 宮城喜代子
久保茂

箏雲井調子 宮城数江
小橋幹子

四、新内かさね身売
鬼怒川物語

浄瑠璃 新内光翁太夫
同 新内勝英太夫

三味線 新内勝一朗
上調子 新内勝史郎

五、長唄綱

館

同	同	同	唄
杵屋直吉	和歌山富太郎	杵屋巳紗風	松島庄三郎
上調子	同	同	三味線
杵屋五三雄	杵屋五三郎	杵屋五三郎	杵屋五三郎

雛子
笛
鳳声
晴郷

太鼓	大鼓	立鼓	小鼓
望月太健志	望月太意次郎	藤舎成敏	藤舎清成

六、常磐津 薪荷雪間の市川 (新山姥)

同	同	浄瑠璃	常磐津	宮尾太夫	三味線	常磐津	文字兵衛
同	同	常磐津	常磐津	勢寿太夫	同	常磐津	八百八
同	同	常磐津	常磐津	初勢太夫	上調子	常磐津	八百二

七、清元 筐花手向橋 (吉原雀)

同	同	浄瑠璃	清元	登志寿太夫	三味線	清元	益寿郎
同	同	清元	清元	政栄太夫	同	清元	高三
同	同	清元	清元	成美太夫	上調子	清元	吉志郎

八、箏曲 桜の宿

石川潭月 作詞
上原真佐喜 作曲

上原真佐喜	山内佐惠次	林真佐乃	嶋村真佐緒	福田真津乃
箏高音	箏低音	箱田佐喜英	箱田佐喜華	

第二部 番組 (四時半開演)

一、箏曲協奏的三章

独奏箏と小合奏団のための

	ソロ	中島靖子	十七絃	宮本雅都
第一箏	大久保雅礼	角本雅亮	徳本雅亮	徳本雅亮
	内田雅秀	宮越雅	角井雅	角井雅
	奥野雅菖	宇野雅恵	宇野雅恵	宇野雅恵
	酒井雅友	丹羽雅韻	西村雅佳	西村雅佳
第二箏	丹羽雅韻	川島雅慧	小川雅澄	小川雅澄

二、新内稻川の内の段

関取千両幟

浄瑠璃	鶴賀伊勢太夫	三味線	新内仲三郎
同	鶴賀梅寿太夫	上調子	富士松亀明

三、義太夫平作内の段

伊賀越道中双六

平作	竹本重之助	三味線	鶴澤三生
十兵衛	竹本越道		
およね	竹本春華		

四、箏曲熊野

箏	藤井千代賀	三絃	岸辺百代
	岸辺美千賀		
	富安美鶴賀		
	高羽洋賀		

五、清元御名残押絵交張（鳥羽絵）

浄瑠璃 清元 寿国太夫 三味線 清元 一寿郎
同 清元 清美太夫 同 清元 国次郎
同 清元 荣志太夫 上調子 清元 美多郎

六、一中道成寺

浄瑠璃 宇治 文彩 三味線 宇治 文好
同 宇治 文美子 同 宇治 文蝶
同 宇治 紫松 同 宇治 紫香

七、常磐津積恋雪関扉（関の扉）下

浄瑠璃 常磐津 文字太夫 三味線 常磐津 菊寿郎
同 常磐津 須磨太夫 同 常磐津 菊雄
同 常磐津 八重太夫 上調子 常磐津 一路郎
同 常磐津 一三太夫

八、長唄廓花柳立髪（廓丹前）

唄 杵屋 勝五郎 三味線 杵屋 勝三郎
同 柏 庄太郎 同 杵屋 三造
同 杵屋 勝左久 同 杵屋 和四蔵
同 坂田 仙蔵 同 杵屋 勝国
同 杵屋 東次郎 同 杵屋 勝吉治

雛子

笛 鳳 晴雄
小鼓 望月 左武郎
立鼓 望月 長左久
大鼓 堅田 喜三郎
太鼓 藤舎 呂雪

歌詞と解説(演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、荻江八

しま 島

荻江節は、明和(一七六四―一七七一)のころ、初代の荻江露友が長唄からわかれて、独特の細やかな唄い方をはじめたのを祖としている。その後幕末になって、三代目の清元齋兵衛がこれに力を入れ、新作を作ると同時に、唄い方にも工夫を加えて、今日のような荻江節を完成させた。

今日演奏されるこの「八島」は、地歌にあつた曲をとり入れたもので、やはり幕末のころ、四代目露友の時代に作られた。

内容は、謡曲の「八島」の後半を名古屋の藤尾勾当が地歌に作曲していたもので、西国行脚の僧が屋島の浦で義経の亡霊に逢い、屋島合戦のありさまをきくという場面。

荻江節としては数少ない修羅物だが、繊細な節で亡霊の語り口をあらわすという、むつかしい曲となっている。

三下りへ釣りのいとまも波の上、霞渡りて沖行くや、海士の小舟のほのぼのと、見えてぞ残る夕暮や。へ浦風までものどかなる、しかも今宵は照りもせず、曇りもはてぬ春の夜の、朧月夜にしくものぞなき。へ西行法師は喚けとて、月やは物を思わする、闇は忍ぶにようかへ、浦風出たぞ来そ来そくもる。また修羅道の関の声、矢叫びの音震動せり。今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登守教経とや。あら物々しや、手並は知りぬ。思いぞ出する壇の浦の、へその船いくさ今ははや、閑浮にかえる生死の、海山一度に震動して、船よりは関の聲、へ陸には波の桶、へ月に白むは、へ剣の光。へ潮に映るは、へ兜の星の影。へ水や空、空行くもまた雲の波の、打ち合い刺し違うる、船いくさのかけひき、浮き沈むとせしほどに、春の夜の浪より明けて、敵と見えしは群れいる鷗、関のこえときこえしは、浦風なりけり高松の、浦風なりけり高松の、朝風とそなりにける。

二、義太夫 沼津里の段

いかにどうちゅうちゅうやく
伊賀越道中双六

寛永十一年(一六三四)十一月七日、荒木又右衛門が義弟渡辺数馬に助太刀をして、河合又五郎を討った。これは俗に伊賀上野の仇討といわれ、三大仇討の一つとして知られており、講談、実録、戯曲などに数多くとりあげられている。この「伊賀越道中双六」はそれらの中での代表曲で、義太夫でも歌舞伎でも、よく上演される。

このもとなつたのは歌舞伎の「伊賀越乗掛合羽」(安永五年十二月初演)で、それをもとに近松半二、近松加助が脚色、天明三年(一七八三)四月大阪竹本座で初演された。もとの「乗掛合羽」ものちにそのまま義太夫化され、この「道

中双六」も歌舞伎に移されるというがあつて、相互に影響し合い、人気のある作品となっている。

義太夫も歌舞伎も、全十段のうち六段目にあたる「沼津平作内」が好評で、ここを中心に上演される。というのは、世話物の色彩が濃く、地方色にもじみ出ており、悲劇的な構成にすぐれ、人物の性格がはっきりしているからである。今日は時間の都合で、第一部、第二部とわけて演奏される。

上杉家の家老和田行家の一子志津馬は、沢井股五郎の悪計にかかり、家宝の正宗の名刀を奪られてしまう。股五郎はさらに志津馬の姉お谷に横恋慕、叶えられずに行家を殺して逃亡する。その前に父に勘当された志津馬は、正宗の刀を手に入れかけるが失敗、足に負傷してなじみの遊女瀬川(今はお米)のところに傷の養生をしているが、はかばかしくない。姉のお谷は唐木政右衛門の妻となつたので、政右衛門は義弟の志津馬に助太刀をすることになる。しかし股五郎の行方はわからない。

ざつとこうした状況があつて、今日の演奏の場面になる。ここは沼津の街道。平作が街道へ出て荷物を持たせてもらうところから。その相手は、二歳のときに養子にやつた実の息子の十兵衛であるが、そのことは知らない。そしてその十兵衛は沢井家出入りの呉服屋で、股五郎の行方を知っている。悲劇はここから幕をあける。

へ東路に、ここも名高き沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ召せ駕籠に召せ、お駕籠やろかい参ろうか、お駕籠お駕籠と稲村の、蔭に巢を張り待ちかける。蜘蛛の習いと知られたり、へ浮世渡りはさまざまに、草の種かや人目には、荷物もしゃんと供廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立場と見かけ立ちどまり、へこれはじたり。大事の用をとんと忘れた。大儀ながらわしが寄つた所まで、一走り往て来てたも、と急ぎの用事走り書き。さらさらさらと書認め、へ「早う早う」

と手に渡せば、主に劣らぬ達者者、こころ安兵衛いっさんに元来し道へ、引き返す。稲村蔭より、

「旦那もうし。お泊りまで参りましようかい。申し旦那様。どうぞ持たして下さりませ。けさから一文も銭の顔を見ませぬ。どうぞお慈悲」といいかけられ、

「イヤイヤ、わしは今夜は夜越しに行く」

「サササ、そこがお慈悲でござります」

と頼みかけられせひなくも、

「さそんなら、吉原までなんぼじゃ」

「エエお前様も、わしが頼んで持つのじゃもの、なんぼのかんぼのとそこえいほどに下さりませ」

「ハア、そうか。そんならやらしやれ。じゃが、年寄のよしにせいでの」

「エエそんなら持たして下さりませ。忝い忝いサササ、お出でなされませ。ヤット任せ」

は声ばかり、一肩往ては、立ちどまり、

「アノ、今日は、結構なお天気じゃな。ヤット任せとな」

二肩往ては息を継ぎ、

「旦那申し、向うの立場に、うまい鱧の名物がござりませ。なんでもマアそこまで往たら、ヤット任せのドッコイドッコイナ」

杖する度に、追従口。深田に下りし白鷺の、餌ばみをするに異ならず。

「ヤコレ親仁殿。ちつと持ってやりましよう。ムムソレンレ、危い、危い。アア気の毒な足元。最前から見ているに、氣しんどでならぬわいの」

「イエイエこれはわしが、足の癖でござります。旦那の蔭で、きょうもうち入りかよござりますわい」

「ムムモウそなたも、幾つぐらいじゃの」

「ハイ、七十に手が届いてござります」

「アアソレンソレ。アア合点の行かぬ足取り」

「アアイエイエ。お氣遣いなされますな。これでも若い時は、小相撲の一番も取りましたもんでござりますわい。なんのお前様。このぐらいの荷物、朝腹の茶がゆでござります。ヤ、ヤット任せの、八兵衛とな」

「アアタタタ」

「それ見やしやれ。エエきついことをしたの。親指を蹴かいたか。ヨシヨシ、早速に治してやる。」
と用意の、薬取出しつけるとそのまま、

「なんとどうじや。痛みは止まらがるの。」

「ハイ、これはマア結構なお薬でござりますな。痛みはとんと治りました。サアサア、サアお出でなされませ。」

「イヤコレコレ、荷はおれが持つてやる。」

「アア旦那様減相な。」

「イヤサコレ、駄賃はやるわいの。氣遣いさしやんな。モこなたの足元、最前から、あぶのうてあぶのうて、荷を持つ方がやつと氣楽な。話してもつて行きましよう。サアサアござれ。」

と先に立つ。平作は千鳥足、しんどが利になる蒟蒻の砂になるかと、悲しさに、小腰かがめて、

「もうし旦那、一肩やりましようかい。」

「アイヤイヤ。これで大分歩きよい。こなたの足元、茶めいたもんじやの。その足取りを、狂言師に見せたいわいの。乱れなどというて、伝授事になりそうじやぞや。」

「イヤ、旦那のおっしゃるとおり、大概、乱れかかっておりますわい。ハハハハ。」

「ハハハハ。」

と道の伽する笑い草。踏み分けて来る道草に、菊の折り枝持ち添えて、見合す顔は、

「とと様か。」

「オオお米じゃないか。今日は結構な旦那のお供したので、荷は持たずにお世話になった。サアサア、ちやつとお礼申しても、お礼申してたも。」

「これはこれがあるがたい。もうここが私のうち。しばらくお休み遊ばしませ。」

と昔の残る風俗も、尾羽打枯れし松蔭に、伴い入るや西日影、佗びたる中の二人住み。門の柱に印の笠。

「お掛けなさるりや、庭一杯。いっそ座敷へ。マアマアお上り。」

と親仁が馳走、娘の愛。前垂の藍薄くとも、

「マアお茶一つ。」

と差し出す、こぼれかかりし藁屋葺。

「折悪う湯も湧かず、水でなりとおみ足を。」

「アアイヤイヤ。もう行きます。さて娘御はよい器量。ぶしつけながらこのうちには、せせなげに咲いた杜若。アよい床へ活けたいのう。」

「ハイ、どなたもさようにおっしゃって下さります。自慢で作っておきましたれど、近頃は手入れが悪さに、いこう田地が荒れました。なにが身には構わず賃仕事。貧乏は苦にもせず、モそれはそれは、孝行にしてくれませ。それで私が、年寄つての靈助も、せめて三文なと肩休めと、あんまりあれがいじらしさでござります。」

「アアコレと様。初めてのにお方に、そのようなさしい話を。」

「オオ、ホンニそうじやの、ハハハハ。イヤなにお米よ。きょうは大きな怪我をしてな。コレコレ、これを見や。爪が起きてある。アア薬もあればあるものじや。あなた様の薬きつい妙薬。ありやなんと申すお薬でござりますえ。」

「サア、この薬は大切な物。第一金瘡には、その場で治る妙薬。武家方には尋ねれども、金銀づくでは手に入らぬ妙薬。」

と語れば、娘はなおほたはた、

「とと様の命の親。一日や二日で、お礼はいいも尽くされず。なるうことなら今宵はここに、御逗留遊ばして。」

「アア娘ないうぞい。こんなうちに泊めまして、肴は干鰯が一定なし。あなたのお身に物はないわい。」

「アアイヤイヤ、不自由は仕つけています。娘御があのように、しなつこらしういわしやるので、どうやらここに根が生えた。大事なくば、いっつ泊めて貰うかい。」

と目の鞘抜けし商人も、上手な娘のもてなしに、ころりとなれば、

「お枕。」

と油気はない真身の馳走。これも一樹の笠舎り。話しに紛れずつぷりと、

「日の暮れてあるに気がつかなんだ。オ、アレアレ、三日月様が上つてござる。宵月夜で行燈はいらぬ。御燈明を伽にして、辻堂の雨宿り。お客様ももうお休み。足伸すと壁につかえる奥座敷。ゆるりと、へへ、ちじかまって御寝なませ。私はこの台所。コリヤ娘。わりやそつちやに

寝いよ。旦那様はお堅いけれど、時のはずみでは、主のある池へ、踏込みなさりよも知れぬぞよ。アハハハハ、ヨ用心には綱は張れじや。オオえいことがあるわい。今夜はおれが股引をはいて寝や。むさげれどあなたには、わしが布子を裾になと。」
追風もてくる、鐘の声いとしんしんと聞えける。

三、箏曲乱

みだれ

りん

ぜつ

(みだれ)

俗に「みだれ」といい、近世箏曲の祖といわれる八橋検校(一六四一—一八五五)の作曲。世に知られた「六段」も同じ作曲者である。純器楽曲で段物あるいは調べ物という部類に入る。「六段」などの段物は、各段の区切りや拍子の数がさまざざであるのに、この曲ではそれが一定せず乱れているからこの名がある。なお「輪舌」というのは、雅楽の「輪説」という特殊な演出様式から出たものだが、俗説も多くある。またふつうの段物は、次第にテンポが速くなっていくのに、この曲だけは途中で急にゆっくりとなるところがあるが、これも曲名の原因の一つであろう。以上のようなわけで、この「みだれ」は段物の中では例外曲となっている。

型を破った曲なので、近代的な感覚がするが、よくきいてみると、掻手(かきて、隣り合った二本の糸を一諸に鳴らす手)が多く、それが一種の不協和音的な効果をあげていることに気がつく。これがやはり近代的な感じを受ける原因である。

覚えやすい曲だが、間のとり方がむつかしいので、この演奏にはかなりの技量を要する。なお、義太夫「本朝廿四孝」狐火の段で、狐が湖水を渡るところの三味線や、長唄「秋色種」のへすががく琴の爪しらべ」のあとの合の手など、これを取り入れた三味線音楽が多くある。

四、新内かさね身売

鬼怒川物語

みうり

原作は義太夫節の「伊達競阿国劇場(だてくらべ・おくにかぶき)」。これのもとには伊達騒動とかさね与右衛門の解脱物語を組み合わせた歌舞伎で、安永七年(一七七八)七月、江戸中村座で初演された。これが好評で翌年には題名もそのまま義太夫節に脚色され、さらに文化五年(一八〇八)三月には四世鶴屋南北作の歌舞伎が中村座で上演されるなど、かさねの物語はよく知られていた。もちろん、清元にも「かさね」があり(文政六年初演)、この怪奇物語、因縁話によく知られていた。

そのうち義太夫節に脚色された「伊達競阿国劇場」全十段から、第八殖生村与右衛門内の段の後半を、新内節に移したものが、初代鶴賀若狭直伝といわれるが、おそらくもう少し後のものであろう。

かさねが夫のために身を売ろうとして、はじめて自分の醜い顔を知り、鬼怒川へ死に行こうとする哀れな物語。もとの筋はたいへん複雑だが、それをはなれて、かさねのあわれな心情をききたい。

「案じいる、へかさねは跡を見送りて、手詰めの金の今の間に、ついとこのうて嬉しやと、思えば悲しき愛き別れ、(中略)」

「あくとんとう旅したびれで、思わず知らず、するするとやっけてのけまししようかいな。」

「おお、さぞお待ち遠でござんしやう。さあそんならその百両の金、渡して下さんせ。」

「いやもうそりやあ、何時でも渡しましようが、してその奉公人は」

「あい、私がごとでござんすわいな」

「ええ、何をじゃらじやらと、さあさあ気がせきます、頼みます」

「いえ、じゃらじやらではござんせぬ、真実誓文、私が身を売るのでござんす」

「ええこなさんは、これ、何いうのじゃぞいの。それ、さつきにいわたした半四郎というしろもの」

「さいなあ、私がごとでござんすわいなあ」

「やあ、この人は気が違つたそう。そんなら何かえ、あのこなさんが半四郎かえ」

「あい」

「いやもう丁四郎がきてあきれわいの。これいの、こなさんのような者を誰がまあ、ほんに夜鷹にも欲しがらぬ者はないぞや」

「ええそりやまあ何でそのように」

「なんでんでそのようにも厚かましい。あんまりあきれ物がいわれぬわいの。ははあ貴様、こりや鏡見たことはないの」

「あい、ちと様子がござんして、鏡見るこならぬわいな」

「いかさまそうである、そうである。生れてから鏡見たことはないの」

「これ、こなたの顔の容体をいうてきかすわ。とつとまあ、何じやあろうと、ぐるり高のちよっぽり鼻、しかも反つ歯で、どうやら横の方に、ちよつとばかり禿が見えて、そのかわりに鼓とまきっているわい」

「ええ」

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

「懐より取り出し、やら腹立ちにさしつければ、思はずはじめて見る顔に、はつとびつくりまだほかに、人もいるやと見廻せば、われならずして面影は、よもやまたも取り上げて、見れば見るほど情なや。こはそもいかに悲しやと、あなたへうろろろ、こなたへ走り、狂気の如く身をもだえ、鏡をはつと打ちつけて、わが身をどうと打ち倒れ、声をはかりに叫び泣き、あわれにもまたいじらしき」

「ええ、いまいましいひまつぶし、このような化物を、百両はさておいて、米一升にも買ひ手はない」と、

「や、ええもすさまじいわい。さいわいここに髻抜き鏡、稀有げげな御面相、それ、とつくりと見やしやれ」と、

この曲は、常磐津でも有名な「戻り橋」の後日物語で、戻橋で鬼女の腕を切り落して帰った渡辺綱は、このような悪鬼は七日以内にその腕を取り戻して来るといわれ、阿部晴明のいいつけ通り、門戸をとぎしてひきこもっている。そこへ綱の故郷から伯母が尋ねて来て、強引に家の中へ入りこんでしまふ。そしてせひともその腕を見せてくれといひ、見ているうちに鬼女の正体をあらわし、腕をとりとめて虚空に消え去るという筋。

曲全体が劇的要素を持ち、筋がわかり易くできているので流行している。なお、新古今演劇十種の「茨木」は同じ趣向の曲だが、これは明治十六年に三代目杵屋正治郎が作曲したもので、素ではあまり演奏されない。

へさるるほどに、渡辺の源次綱は、鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝やかせり。へさりながら、かかる悪鬼は七日のうちに、かならず仇をなすなりと、陰陽の博士、晴明が勘文にまかせつつ、へ綱は七日の物忌みして、仁王経を誦誦なし、門戸を閉じてぞいたりける。へすでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、これひとえに、君の御威徳ならずや、然るに、晴明が勘文にしたがい、あら気づまりの物忌みやな。

へかかるところへ、津の国の渡辺の里よりも、訪ねて伯母のきたしぐれ。へ紅葉の笠も名にめで、錦をかざすふるさとの、孝の力や杖つき乃の字の姿をも、うしとはいわで牽かれつる、綱が館に着きにけり。

へ門の外にたたずみて、いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり。この門開き候え、疾く開けめされい。へ内には綱の声高く、はるばるとの御出なれど、仔細あつて物忌みなれば、門の内へはかなわす候。へなに、門の内へはかなわぬとな。へ是非に及ばず候。へあら曲もなき御事やな。和殿が幼なきその時は、みづから抱き育てつつ、九夏三伏の暑き日は、扇の風にて凌がせつ、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ねあたためて、和殿を綱といわせしこと、ああ皆みづからが恩ならずや、恩を知らぬ人ならず。ええ汝は邪慳者かなと、声をあげてぞ泣き給う。

へさしにも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門をおし

へつぶやきつぶやき立ち上り、せめておすねで腹癒よと、泣き入るかさを踏みとばし、足を早めて立ち帰る。へ前後正体泣きくずおれ、顔も得上げずいたりしが、ああ、思えば思えば恥かしや、こいう私が顔ゆえに、鏡を見せぬ夫の心、その顔もせず朝夕に、可愛いがつて下さんした、お情すぎて情なや。なせうち明けてありように、いうてきかして下さんせぬ。また姉さんも胸欲な、現在の妹を、これほどまでに憎いかえ。こいうことと露知らず、今の今までわしが身で、きりよう自慢をしていたが、恥かしいやら悲しいやら、なに面目に与右衛門殿、どうまあ顔が合さりよう。せめて夫に同じ名の、鬼怒川へ身を投げて、死ぬるは未来で連れ添う心。とはいいながらさつぱりと、思いきられぬ惚れた仲、死んだ跡では美しい、女中を女房に持たしやんしよと、そればつかりが気にかかり、よう浮かまぬでござんしよ。可愛いと思つて折節の御回向頼み上げますと、くどき立てくどき立て、絶え入るばかり泣きつす。

へ沈むおもりとあたりなる、茹豆籠を身のしず、負われ追わるる死神の、もし仕損ぜば身の恥と、見廻すそばに錆びもせで、研ぎ立て鎌は今宵置く、草葉の露と消えよかと、いと哀れを添えにける。

へ秋雨の、音立ち帰る夫の足音、今さらに顔を合らすも恥かし、見つければれいと吹き消す行燈。

へお灯が消えてある。女房ども、かさね、かさね」と与右衛門が、すれ違つたる門の口、

「誰じや誰じや、そこへ出るのはかさねじやないか」と、

へい声あどなきさして、女心の一筋に、こけつ転びつ走り行く。はてあやしやと思えども、あやもわからぬ真の闇、あとを慕うて急ぎ行く。

五、長唄綱つな館やかた

明治二年、根岸の勘五郎といわれた十一代目杵屋六左衛門作曲。このもととなつたのは、寛保元年（一七四一）七月江戸中村座上演の「兵四阿屋造」で、これを復活したものが、歌詞はほとんどそのまま使っている。

開き、奥の一間に請じける。へいやとよ綱、鬼神の腕を切りとられし武勇のほど、凡そ天下にかくれなし、じてその腕はいづこに在りや。へすなわちこれにと唐櫃の蓋うち明けて、伯母の前にぞ直しける。

へその時伯母はかの腕を、ためつすがめつしげしげと、眺めながめていたりしが、次第しいに面色変り、かの腕を、取るよと見えしがたちまちに、鬼神となつて跳び上り。へ破風を蹴破り現われ出で、あたりを睨みし有様は、身の毛もよだつばかりなり。

へいかに綱、我こそ茨木童子なり。わが腕を取り返さんそのために、これまで来ると知らざるや。へ綱は怒りて早速を踏み、斬らんとすれども虚空にあり。へいかにかなして討ち取るべしと、思えど次第に黒雲おおい、鬼神の姿は消え失せければ、かの晴明が勘文に、背きしことの口惜しさよ。なお時を得て討ち取るべしと、勇みたつたる武勇のほど、へ感ぜぬ者こそなかりけれ。

六、常磐津 薪荷雪間の市川いちかわ（新山姥）

山姥というのは、山に住む怪物といった意味で、超自然的な存在として考えられていた。これが劇化された最初は能楽の「山姥」で、遊女あがりの女芸人で山姥の山めぐりの曲舞を得意とする百万山姥が、善光寺参りの途中、信州上野の山中で本物の山姥に逢い、山めぐりの舞を見るところ筋になっている。

それを、近松門左衛門は「嶺山姥」で、遊女あがりの女芸の家七重桐が、坂田時行の魂を胎内に宿し、信州上野の山中に住み、時行の子怪童丸を生み山姥になっている、という風に改作した。

これが発展して多く頼光四天王の世界の顔見世狂言にとり入れられ、歌舞伎の所作事に多くの作品を生み、重要な系統

となった。それらの曲は、山姥の山めぐりと、怪童丸（のち金時）の荒事が中心であった。これらの多くの作品を集大成したのがこの「新山姥」で、それまでの各流の長所をとってあり、とくに山めぐりのあたりは力を入れて作曲している。常磐津のエッセンスともいえるべき名作で、舞踊にもとりあげられる事が多く、流行している。

嘉永元年（一八四八）十一月、江戸河原崎座初演。三升屋二三治作詞、四世岸沢式佐作曲。

四面岨々たる足柄山、麓に通う椎が本、巖に染める蔦かづら、君命受けてますらおが、曲げたる脇の高枕、げに一瓢の楽しみの、眠りをさます山嵐。山高うして雲行客の跡を埋む。君命うけてこの日頃、かく山賤と様を変え、深山幽谷きらいなく、行きなり次第の気まま酒、眠けざましに、どりゃ一杯やるべいか。酒はかりなき盃に、注げば映ろう星の影。

よき蔵へあら怪しやな。客星ここにたんだくなし、我が盃中に影さすは、さては一定人傑の、この山中にあるという、天の知らせか何にもせよ、奇異なることを見るものじやなあ。ははあこれで読めた、心あたりは山住みの、女が連れるいつもの小僧、どりゃ一服のんで待つべいか。

錦の袂引きかえて、木の葉衣を露霜に、染めてあげろの山姥と、人や岩間の若清水、心細道たどたと、杖を力に歩みくる。よき蔵へおのおおふくろ、今日はまだ逢いませぬの。

山姥へお山賤のよき蔵殿、また焚火のご馳走しましょうかいの。よき蔵へそれはかたじけねえ。ときに小僧はどうしましたな。山姥へさればいの、あとの麓まで連れ立って来ましたが、おおかた猪猿を相手に、相撲がなとていましようわいな。

よき蔵へそれは危ない、早うこへ呼ばっせい、呼ばっせい。山姥へほんにまあ、おとましい事ではあるぞいのう。へあおとましいとかこち言、それと見つけて、よき蔵へあれあれ御覧じませ、あのような大きな石をもてあそんで、怪

二上りへおらが在所はな、奥山のでてうちの、でんぐりでんぐり、栗の木の根を枕にござれ、抱いてころび寝。

怪童へかかさま、乳のもう。

へ乳のみたいと足ずりは、頑是なき子の習いかや。山姥へこれはしたり、どうしたもの。さあさあこれから、またいつもの山廻りの話を聞かせましようぞ。

よき蔵へなに、山めぐりの話、こいつは面白からうわえ。山姥へ何のいなあ。

昔語りも恥かしい、ありし姿もどこへやら、無明の滝に髪洗い、若葉を見ては春を知り、妻恋う鹿の音をきいて、秋と思うて深山路を、あしたあしたの山めぐり、よしあしあしびきの山廻り。四季の眺めも色々に二上りへ浮き立つ空の弥生山、桃が笑えば桜がひぞる、柳は風のおうよりに、誰を待つやら小手招く、霞の帯の辛気らし。しめて手と手の盆踊、へななこの池に移り気の、うらみ過しの梶の葉は、露の玉章落ちそめて、へ焦れてぬらす袖の梅、ついでまされて室咲の、梅の暦もいち早く、へ門に松立ちやな、つい難も出るかと思えばほととぎす、あやめふく間に盆の月、待宵すぎて菊の宴、はや祝い月里神楽、ほんにほんにせわしき浮世も我も、白雪積る山めぐり、山廻り。

三田仕へほほう、この程より心をつけてうかがうところ、さては柔弱非力を悔み、横死を上げし坂田蔵人が妻伴、この山中にこもるとききしが、もしや二人は、

山姥へいかに、その坂田の家を興さんと、山神へ祈誓をかけ、すなわちもうけしこの怪童。

三田仕へさてこそ我が推量にたがわず、時行が妻伴よな。さるにても女に稀なる志、その丹精に山神の加護、伴が勇力さぞあらん。力の程が、見たいみたい。

怪童へおもちれえ、おもちれえ。山姥へこれこれ怪童、大事のところじゃ、負けまいぞ。怪童へおお合点だ。へ神変不思議の怪童丸、こなたあしらう勇力士、怪童いらってかたえなる、松を根こぎに引き抜き、にっこり笑って立ったりしは、人も恐るるばかりなり。

我でもしたらどうしようと思やるぞ、道草も程がある。こりや怪童丸、怪童丸やあい。

怪童へおおい。へ神楽月とて片山里を、笛や太鼓で面白や。足の冷たいに草履買うてたもれ。子をどろ子とろ、どの子が目つき、あとの子が目つき、籠目かこめ、かこの中の鳥は、いついつ出る、夜明のぼんに、つるつるつった、木の根笹原くぐりくぐって、ひよいと出たみどり子。山姥へこれこれ怪童、早うおじやいの。

怪童へあい。へ母を慕うて山道を、尋ね木咲の梅の花よき。

怪童へかか、おらん花折ってきたよ。へ花うちしようと振りたてて、いたづら盛りの愛らしき。

よき蔵へやれ小僧、よく帰って来たな。山姥へおおう戻っておじやったのう。さあさあいつもの通り、小父様へおじぎじや、お辞儀じや。

よき蔵へおお、お辞儀がよく出来ましたな。怪童へかかさま、何ぞ下されや。

山姥へおとなしゅう遊んでおじやったその褒美に、この間から、あつかの衣織って着しようと思うてな、山路めぐらぬそのひまに、五百機立つる窓の内、

へ枝の鶯、糸繰り綿繰り、織って着せたる母のほんそ子、里へ下れば、里の土産は、でんでん太鼓にふり鼓、へうつや空蟬のから衣、千声萬声の砧に合わず鼓の拍子、へ面白や。

怪童へさあこれからが馬事じや、馬事じや、よき蔵へどれどれ、おれがいいものを貸してやろう、このまさかりを馬にして。

山姥へ母が離してやりましよう。へ月毛にあらぬ斧の駒、へとるや手綱のりりしげに、先のけさきのけ先のけろ。へお月様いくつ。へ十三七つ。へお供はいくつ。へ八十八つ。

へほんにそりや若いなあ。へ母の胎内蹴破って、へ産所も産湯も山なれば、取上げお婆に事をかき、産湯の代りに四方の赤、浴せられたかどっこもかも、まっかくなつて北嶺峨の、踊りくどきは、へ何というた。

三田仕へほう、力の程は見えた見えた、今よりしては頼光公の家臣となり、父が家名をそのままに、坂田の金時と名乗らせん。喜べ。よろこべ。

山姥へははあ、ありがたやかたじけなや。こりや怪童、今日から坂田の金時というさむらいになるのじやが、嬉しいかや。

怪童へそんならおれは、さむらいになるのか、嬉しいうれしい。山姥へさりながら、今別るればこの母は、もう逢う事はならぬぞや、これ怪童こへおじや。

へ夫の形見と見るにつけ、そなたの大事さ大切さ、今日別るれば今宵より、母ひとり寝の間の内、さぞ面影のなつかしから。頼光公へ御奉公、つとむるひまのあけくれに、へ武術をはげみ立身せよ、必ずかならず人様に、へ山姥が子と笑われな。今別るともこの母が、へそなたの影身につき添うて、なお行末を守るべし。とはいうもののがまあ、へ名残惜しやいとおしやと、抱き上げ抱きつき、思わずわつと一声が、木魂にひびきて哀れなり。

山姥へかくては果てし怪童丸、お頼み申すは仕さま、名残は尽きじはやおさらば。

へ暇申して帰る山の、へ峰も梢も白妙は、源氏の栄え尽きしなき、守る神垣は妄執の、雲の塵積もつて山姥となれり。山また山に山めぐりして、行方も知れずなりにけり。へかかる所へ猪熊入道、手勢ひきつれ馳せ来り、怪童丸を見るよりも、

猪熊入道へ正盛公の上意をうけ、汝を味方にかかえんと、出かけて見れば、三田の仕、さてこそ源氏へひきとつたな。

三田仕へしれた事だ。怪童丸はたった今、頼光公へ推挙したわ。奉公はじめにこいつらを、引くくつて君へのお土産、怪童ぬかるな。

怪童へさあ弱虫めら、みんな一度に、こいこい。

猪熊入道へなにちよこさいな、ものども、それ。
へやらぬと組みつく手の者を、一度につかんでつぶて投げ、かつ色見する金時が、まっさきかける冬至梅、一陽ひらく智勇の花、歌舞伎の栄えぞめでたけれ。

七、清元 花手向橘 (吉原雀)

かたみのはなむけのそでのか

文政七年(一八二四)二月、江戸市村座の「茶の湯景清」の大切所作として初演された。放鳥売おしず(岩井紫若)、放鳥売七兵衛(七世市川団十郎)の出演で、三升屋三三治作詞、清元齋兵衛作曲。四世市村竹之丞の百年忌追善興行の出し物なので、それを題名にきかしてある。
長唄の「吉原雀」(明和五年十一月初演)を借り、これに筆を加えたもので、前半の二上りの素見ぞめきまでは、長唄そのまま。「深山の奥……」は投節、「へそうした黄菊」からクドキで、「苦界する身」は新内ガカリ。あと一中節「傾城浅間獄」の鳥尽しをチョボクレでやって賑やかになる。
長唄の曲を利用しながら、清元の旋律を加えているところに、おもしろさがある。文化文政時代の吉原気分、イキな感覚がよくあらわされている。

へ俳優の、昔を今に教え草、吉原雀の故事を、ここに写して三つ扇、たれも三升とやつしこと。

へ凡そ生けるを放つこと、人皇四十四代の帝、元正天皇の御宇かとよ、

へ養老四年の中の秋、宇佐八幡の託宣にて、諸国にはじまる放生会、
へ浮寝の鳥にあらねども、今も恋しき一人住み、へ小夜の枕に片思い、可愛い心と汲みもせて、何じややら憎らしい、へその手で深みへ浜千鳥、

のどかなありさまを詠み上げた作品で、「冊子の雪」「月づくし」「桜の宿」と三部作になっている。

今日演奏されるのは、その花の巻で、「堤中納言物語」の「花折桜の少将」に取材した。少将がむかし心を通わせた女性への思慕の情を、宿の桜にしほせて述べてたもの。箏は高音、低音の二部形式になっており、旋律の表現も気品の高さをねらい、平安時代の品位とゆかしさを表現している。なお、この曲は昭和四十年度の芸術祭参加作品として初演され、文部大臣賞を受賞している。

へさるほどに少将は 月の光に謀られて 夜ぶこう行けば

花の枝 梢はひとつ

へ桜の宿とところづき 年ごろ 心かよわする 女やいかにと

問いければ たづぬる人は すでになく 破れし築地に 花の散る

へ幻か 花の盛りか透垣に ほの色見えて なつかしき

柏めすがたも艶やかに うちすきたる 髪の裾

小桂 映えてなまめかし

へ扇をば 花散る方にさしかくし

あたられ夜の月と花とを同じくは

心知られむ人に見せばや

へ舞の姿は いつしかに 消えて儚なき 春の夜や

桜多くて 哀れげに 荒れたる宿に 少将の

昔を偲ぶ 姿かな

へ散る花を 惜しみとめても 君なくば 誰にか見せむ

宿の桜を……

通い馴れたる土手八丁、口八丁に乘せられて、沖の鷗の、へ二挺立ち、
へ三挺立ち、へ素見ぞめきは椋鳥の、群れつきつき格子先、叩く水鷄の口まめ鳥に、孔雀ぞめきで目白押し、見世清播のてんつとん、さつさ押せおせ。

へ馴れし廊の袖の香に、へ見ぬようで、へ見るようで、へ客は扇の垣根より、へ初心可愛ゆく前渡り、へさあさあ、来たぞ来たぞ、来たぞよ、へさあ来た、また来た、へなに、さしがあると、へさわりじやないか、へさしもすさまじいわ。へまたおさわりか、へおいせんしゅう、頼むぜ、へお腰のものも合点か。へそれ、からかさそこへ置け、へ二階座敷は、へこう、右か左か。へずうつと奥座敷でござります。へ新造そさまは、寝てもさめても忘れぬ、へどうぞ二人がこっそりと、へ深山の奥のその奥の、ぐつとの奥の佗住居、へ憎いぞえ。

へそうした黄菊と白菊の、同じ勤めのその中に、へきりと呼ばれるはかなさは、へ年が明くの待ちかねて、やっぱりしたばと呼ばれたく、男ゆえなら楽しみに、へ苦界する身を立てるとて、義理一遍のあだつきは、結局心のもめる種、へ勤めする身も素人も、女子に二つはないわいな。

へよしてくれよしてくれ、よしてくれよ。
へ吉原雀の雛から飼われて、へ山雀小雀のくちばしなんぞで、てれんの初音を、聞いてもくんねえ、へうそ鳥やないと日文の駒鳥、そこらの目白が見つけてせきれい、へ約束雀は昼でもよしきり、ちよつと格子へ顔鳥出せとは、さりととはひわ鳥、へ鶯のこんたん秘密は手管のくだかけ、へ奇妙鳥類籠の鳥、へわけも何やらおかしらし。
へげに花ならば桜どき、月なら最中竹村に、その青楼の名にし負う、新吉原という雀、今に噂や残るらん。

八、箏曲 桜の宿

石川潭月作詞、上原真佐喜作曲の「雪月花シリーズ」が完成したのは、昭和四十年のこと。いずれも平安時代の優雅で

第二部

一、箏曲 協奏的三章

独奏箏と小合奏団のための

この曲は、昭和三十五年に「箏独奏のための練習曲」として、中島靖子氏が独奏用に作曲されていたものを、協奏曲風に書き直したものである。

箏の伝統的な調絃と手法を使って、それぞれ独立した三つの楽章から成っている。第一楽章は、ソナタ形式による手事風な曲、第二楽章は、子守唄とその自由な変奏による展開、第三楽章は、民謡調の軽快なロンド形式で書かれている。伝統を守り伝えるとともに、新しい生命を持った箏のひろがり味わっていただきたい。

二、新内 稻川内の段

関取千両幟

原作は同名の義太夫節で、明和四年(一七六七)八月竹本座初演。近松半二、三好松洛らの合作。新内に移されたのは、初代鶴賀若狭掾(天明六年没)の時代といわれているが、あ

るいは二代目鶴賀鶴吉の時代かもしれない。

原作の義太夫は全九段という長篇のため、筋も複雑。彦根藩御用をつとめる大阪商人鶴屋浄久の息子礼三郎は、遊女錦木に溺れ、その身請金を調達する際、悪人の九平太一味にせ金をつかまされ、勘当の身となる。そして同時に彦根藩の三島弥平太の娘お才が、許嫁のある身で礼三郎と密通していたことがあらわれ、これも勘当され、礼三郎を頼ってくる。礼三郎は困ってしまう。そこで浄久に恩を受けていた力士稲川が、礼三郎と錦木を預かり、お才は稲川の親友千羽川の女房が預かる。

これが事件のはじまりで、九平太の手先には、力士鉄ヶ嶽がいる。その結果、稲川と鉄ヶ嶽の争いという形で事件は展開していく。

錦木の身請の金七百両は、そのうち五百両を浄久に出してもらったが、残金二百両は稲川が調達することになる。しかし工面はつかず、いよいよ今日中に二百両を渡さないと錦木は九平太に身請されてしまい、錦木と礼三郎を添わせることはできなくなる。そのとき、鉄ヶ嶽が稲川と連れだって稲川の家へやってくる。

稲川は、九平太の錦木身受けを延期してくれるように、鉄ヶ嶽に頼む。鉄ヶ嶽は、先日恵海庵で九平太が、稲川にひどい目にあわされた仕返しを頼まれていたといつて、稲川を踏みさいなむ。今日はここから演奏される。相撲割が届いてみると鉄ヶ嶽と稲川の取組となっている。鉄ヶ嶽は錦木身請のことは俺次第、魚心あれば水心と、今日の土俵で勝をゆずれと匂わせて帰って行く。稲川は、この相撲に負けようと決心する。

それと知った女房が、稲川の髪を梳きながら、本心をうちあけてくれぬことを嘆き、恨みくどく。きかせどころのへ相撲取りを夫に持てば……は、原作の義太夫になかった部分で、のちに義太夫に逆輸入されたほど。
なおこのあとは、いよいよ取組となり、稲川が危くなる。

「おおこちの人としたことが、さつきにから飯こしらえて待っているのに、ここで食べるか、奥へ据えよか」と、

「何気なればそしらぬ顔、

「いやもう、飯なら食いとうない、ほんに場所から呼びにきた、どれ行て来う」と、へ立ちあがれば、

「そんならもう行かしゃんすか、これ稲川殿、それ髪が強うみだけてあるぞえ、人中へ見苦しい、結うて上ぎよう」と、

「取り出す櫛箱、

「いや、結うていたら暇がある、つい撫でつけておいてたも」

「かたえに直れば女房も、押しはいわぬもつれ髪、びんのほつれを撫でつける、櫛のむねより妻の胸、写して見たき鏡立て、

「さよいか、見やしゃんせ」と、

「向う鏡の蓋取って、写せば写る顔と顔、

「もうし稲川殿、色も青ざめ、そして目の中もうるんで、どうやら気色の悪そうな顔付き、今日の相撲へはことわりいうて行かしゃんすなえ」

「何をあんだらつくぞえ、いつはともあれ、今日の相撲は鉄ヶ嶽にこの稲川、初日の出ぬ先から町中が待っている晴れの出逢い、何でも鉄ヶ嶽を土俵の砂へ埋まにやおかぬ」

「いやいやそりや嘘じゃ、今日の相撲は鉄ヶ嶽に振ってやるお前の心」という口押さえて、

「こりや声が高い、すりやさつきにからの様子、残らず」

「あい、一間できておりました。わずかな金に手詰まって、難儀さしやんすがわしや悲しい、いっそのわけ、親仁様へ」

「たわけめ、それいっほどならこのように、人に叩かれ踏まればせぬわやい。昔かたぎの親仁様、打ち明けて物いうとな、礼三様へ意見の何のとやかましい。若いお人の水の出端、もし命生害になったときは、こりや千日に蒔った芽じゃわやい。ああ、急なことでさえなくば、工面のしようもあろうに、わずか二百両や三百両の金ゆえに、大事の相撲を振ってやらざあなるまいと、思えば不甲斐ないやら口惜しいやらで、俺やこの胸が裂けるようなわやい」

「お公道理でござんす、道理じゃ道理じゃ」

「さりながら、それほどの大事のこと、連れ添う女房にかくさんす、お

そのときこの勝負に二百両が賭けられたことを知って、稲川は鉄ヶ嶽を倒してその金を手に入れる。しかしその金は、稲川の女房が身を売った金で、やがて夫婦の悲しい別れとなる。

「弱身につけこむ厄病の、髪も頭も引きしやなぐり、さいなむ折から表へ息せき、

「はい、今日の相撲割でござります、もう追っ付け土俵入りじゃほどに、早うおいでなされませ」と、

「書付ほり込み立ち帰れば、へ陀多右衛門押し開き、

「む、何じゃ、鉄ヶ嶽に稲川」

「すりや今日の相撲は」

「こりや見い、俺とわれとが相撲じゃとやい」

「時も時」

「折も折」

「わが身と」

「俺が立ちあいとは、はて気味合いなことじゃいのう」と、

「いっも心に一思案、

「こりや、われも池田の稲川というては、国々へ名の通った者、俺もまた大名のお抱え、ことに大阪は初めてなれば、この相撲、しくじるが最後、扶持ばなれじゃ、すりやこれ、二人ともに大事な相撲、九平太様の名代に恵海庵の仕返ししたれば、この算用はすんである。が、また錦木が身受けのことは俺次第、おこの鉄ヶ嶽が心のままじゃ。水心あれば魚心あり、頼むことも頼まることも、まあ今日の相撲ももうてからのことにしようわい。われもずいぶん、神仏でもたたき廻して俺に勝つようにせい。したが可愛いや、俺を取ったら骨身が砕けて、重ねて土俵を踏むことはならぬぞよ、どうぞ頭取衆を頼んで、振りかえてもろうてなりとして、取らぬ方が勝ちやろうて。それともまた、取ってみようと思ふなら、なあ魚心あれば水心、稲川土俵で逢おう」

「強い言葉もどこやらに、味な鉄棒引きさずる雷駄、がらつかせてぞ出でて行く。へあとに稲川もろ手を組み、思案にくれていたりしが、(中略)へ始終立ちぎく女房が、涙かくして、

前の心がきこえぬぞや。へ相撲取りを夫に持てば、江戸長崎国々へ行かしゃんしたその後の、留守はなおさら女気の、ひとりくよくよ物案じ、惚れた女子はありやせぬか、短気な心は出やせぬかと、思い廻しの胸の内、推量してと取りすがり、恨み涙に時移る。へはや追い追いの呼び使い、

「もうし関取、土俵入りでござります、早うお出でなされませ、ちやっどちやっど」に稲川が、へしおしおとして立ちあがれば、

「そんならもう行かしゃんすか稲川殿」

「お鉄ヶ嶽を抱き込んで、工面の通り行きやかくべつ」

「もし行かねば」

「絶対絶命、これが暇乞いなるうもしれぬ、さらば」

へとばかり一声を、あとに残して出でて行く、へこれまあ待って稲川殿、

たった一言いいたいことと、へ見れどもあとは雲霞、

「こりやこうしてはいられぬところ、夫の命にかかわる勝負、わしもこれから相撲場へ」と、

へ帯引きしめて夫のあと、慕うてこそは、へ行く空に、響く櫓のとうか

らと、打ちしもうたる太鼓より、鳴り渡つたる稲川と、鉄ヶ嶽との相撲

割、表にべつたり貼り紙も、張り裂く木戸口押し合いへし合い、はや土

俵入りの事終り、相撲の番数とりつくし、中入前ぞ勇ましき。

伊賀越道中双六

三、義太夫平作内の段

無理に十兵衛を平作の家へ泊めたけれども、お米にしてみれば、父の怪我をたちどころにおしてくれた薬が、志津馬のために欲しい。十兵衛が寝込んだのを見て、それを盗むお米の気持。

第一部で演奏された「沼津里の段」の続きで、平作の家の

場になる。(第一部の解説を参照)ここで平作が実の父、そしてお米が実の妹と知った十兵衛は、わざと薬の入った印籠を忘れ、金三十両を置いて出発する。この場面の続きが「千本松原の段」で、平作が命をかけて十兵衛から股五郎の行方をさぐるところになる。そしてやがてめでたく股五郎を討ち取るまでであるが、それはずっと後のことである。

「お米は一人もの思い、心にかかる夫の病氣、わが手で介抱することも、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え残る、仏壇の灯もほそぼそと、嵐にふっと気が付く娘。」

「奇妙に治ったと様のあの疵。今でも敵の手がかりが知れてから、あの病氣では思いも寄らず、ムム」

「と心でうなずき胸を握え、灯の消えたるは天の与え、夫のためと、抜き足さし足探り寄り、印籠取り上げ立ち退く足、つまづく音に見覚す十兵衛。思わず高声。」

「なに者」

と裾を捉えて引き留むれば、

「わっ」

と泣き入る娘の声。

平作もびっくりし、起き上っても真暗がり。

「お米、お米」

「といったつ探すかまどの埋み火。付木に移し顔見合せ、

「ヤア、娘じゃないか。旦那様か。なにゆえにこのありさま。なんの因果でこのような、情ない気になったぞいやい。コリヤ、この親はな、その日暮しの者じゃけれどな、人さまの物一文半銭。盗もうと思ふ気は出さぬわい、出さぬわいやい。モ気を急いでござる旦那を無理に留めまし、親子いい合せてこんなことしたかと思われては、旦那の手前おりや面目ない、面目ない面目ないわい。エエ親の顔まで穢しおった」

とわつとばかりに、泣きいたる。十兵衛は氣の毒顔。

「ハテモ、金銀を取ったというではなし。これには訳のありそうなこと」と問われてお米は、顔を上げ、

「恥かしながら聞いて下さりませ。ようすあっていい交せし夫の名は、

「姉御。さらば」

とばかりにて、心に一物荷物先へ、道をはやめて急ぎ行く。跡に親子は顔見合せ、金取り上げて、

「コレお米。ずいぶん大事にかけておきや。夜明けまでは間もあり、そなたも休みや」

と水入らず、見廻す傍に落ちたる印籠。

「アアこれは今の旦那のじや。定めて尋ねてござるであらう」

「この印籠はどうやら覚えのある模様。ハテ合点のゆかぬ。それがこれか」

とよくよく眺め、

「オオほんにそれよ。コリヤコレ沢井股五郎が、常づね持ちし覚えの印籠」

「ハテ、不思議な」

と平作も、金取り出しよく見れば、

「エエ金子三十両。この書附はエエ鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名は平三郎。母の名はお豊。オオコリヤコレ、わが子につけておいた書附」

「そんなら今のお方は、私がためには兄様」

「オオわが子の平三であつたかい」

「そんなら最前からの親切は」

「オイヤイ、それとはいわずこの金を、貢いでくれた石塔代」

不思議の縁と親と子は、しばし呆れていたが、お米は印籠手に取って、裾端折って駆け出す。

「コリヤ待て娘。コリヤどこへ」

「どこへとはと様。この印籠を持っている、その兄様は敵の手がかり。追っかけて股五郎が所在を尋ね、志津馬様へ」

「オオ尤もじゃ尤もじゃ。ガわれではいかぬわい。年寄つたれどもこの平作。理を非に曲けてもいわして見しよう。われも続いて跡から来い。」

「どのようなことがあつてもな、かならず出なよ。敵の所在聞くまでは大事の場所。木蔭に忍んで立聞きせい。ナア、合点か、合点か。ヤ、本海道は廻り道。三枚橋の浜伝い、勝手覚えし抜道を」

と子ゆえに迷う三悪道、こけつ転びつ走り行く。

申されぬが、私ゆえに騒動起り、その場に立合い、手疵を負い、一旦本復あつたれど、この頃はしきりに痛み、いろいろ介病尽くせども効なく、立寄るかたも旅の空。この近所で御養生、長しい間に路銀も尽き、その貢に身の廻り、蓆、筭まで売り払い、悲しい銀の才覚も、男の病が治したさ。先ほどのお話に金銀づくではないとの噂。燈火の消えしより、あの妙薬をどうがなと思いつきしが身の因果。どうぞお慈悲にこれ申し、今宵のことはこの場切り。お年寄られしお前にまで、苦勞をかけし不孝の罪。きょうや死のうか、あすの夜はわが身の瀬川に身を投げてと、思ひしことは幾度か。死んだ跡でもお前の歎きと、一日暮しに日を送る。どうぞお慈悲に御了簡」

と東育ちの張りも抜け、恋の意気地に身を砕く、心ぞ思いやられたり。歎きのはしはしくづくくと、聞き取る十兵衛。

「コレ姉御。そんならこな様は、江戸の吉原で全盛の、松葉屋の瀬川殿じゃの」

「ハイテモよう御存じ」

「すりや瀬川殿の夫のために。ムム、ムム」

と心の目算、思案を極め、

「イヤコレ太夫殿。夫の手疵治す薬、欲しいは尤も。それ聞いては進ぜたいものなれど、これは人の預かり物。このことはとんと思ひ切らしやれ。今こなた衆の話のとおり、わしもまた恩を受けた、イヤサア、その恩を受けた人のために、いづれの寺でも苦しうないが、石塔一つ寄進がしたい。ガなんと世話して下さるまいか」

「ハイ、イヤそれは御奇特。結構な御寄進でござります。イヤモ、なん時なりとお世話いたしましたし。私も来年は嘯が年忌。勧むる功德ともに成仏とやら、ぜひお世話いたしますので、ござります」

「サア、どうぞ今度の下りまでに、違わぬように頼みます。かねての願いに書附も、このうちに委しうござる」

と金一包取出し、

「コレかならず頼んだぞや。親子の衆。もはや夜明けに間もなし。ずいぶん無事に、親仁殿」

と立ち出づれば、平作も、

「かならずお下り待ちます」

四、箏曲熊

野

原作は世阿弥作の能「熊野」。『平家物語』巻十の「海道下り」にもとづいている。

平宗盛の愛妾熊野御前は、都に留めおかれていた。故郷の遠江から待女の持参した病母の手紙を宗盛に見せ、今のうちに一目逢いたいと暇を乞うが許されず、花見の車に同車させられる。東山のかなたを仰いで病母を案ずる熊野の心をよそに、無常の車はほどなく清水に着く。やがて酒宴がはじまり、宗盛にすすめられて舞ったが、舞なればでにわか雨が降って来て花を散らす。彼女がその心情を一首の歌に託して宗盛にさし出すと、さすがの宗盛もあわれと感じて暇をあたえる。熊野は喜びつつ、そのまま東をさして急ぎ帰る。

山田流箏曲の祖山田検校が、能の後半の囃子の部分を原規として作曲したもので、同検校晩年の作と推定される。「小督」「長恨歌」「葵の上」とともに山田流を代表するいわゆる四つ物の一。奥歌曲。箏は半岩戸調子(三絃二上り)で出て、(ほとけも……)で雲井調子(三下り)となり、(春も千々の花ざかり)で鼓の手などをとり入れた合の手になる。あと謡がかつたシテ、ワキのやりとりとなり、(あな心なの村雨やな)あたりをヤマとして、終りは雲井調子。謡曲の節調や気分を巧みに取り入れてあり、拍子や旋律は変化に富んでいる。咲きほこる花に人の命のはかなさを結びつけた能の気分が、いっそうあわれに感じられる。難曲とされている。

時間の都合で一部省略して演奏されます。

清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらわし、諸行無常の聲やらん、地主権現の花の色、沙羅双樹の理なり。生者必滅の世のなほ、げにためしある粧い。仏ももとは捨てし世の、半ばは雲に見えぬ、驚のお山の名を

残す、寺は桂の橋柱、立ち出でて峯の雲、花やあらん初桜の、祇園林下河原、南を遙かに眺むれば、大悲擁護の薄桜、熊野権現のうつります、御名も同じ今熊野。稲荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、また花の春は清水の、ただ頼めたのもしき春も千々の花ざかり。(合)
へ山の名の、音羽風の花の雪、深き情を人や知る。へ妾お酌に参り候べし。へいかに熊野、ひとさし舞い候え。へ深き情を人や知る。へこのうのうにわか村雨の、花を散らし候はいかに。へげにただいまの村雨に花の散り候よ。へあら心なの村雨やな。
へ春雨の降るは涙か、降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ人やある。へよしありげなる詞のたね、取り上げ見れば、いかにせん、都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん。げに道理なり哀れなり。はやはやいとま取らすぞ、東に下り候え。へなに、おいとまと候や。へなかなかの事、とくとく下り給うべし。へあら嬉しやな尊やな、これ観音の御利生なり、これまでなりや嬉しやな、これまでなりや嬉しやな。
へかくて都にお供せば、またもや御意の変るべき、ただこのままにおいとまと、夕告げの鳥が鳴く、東路さして行く道の、やがて休らう逢坂の関の戸さしも心して、明けゆくあとの山見えて、花を見捨つるかりがねの、それは越路、われはまた、東に帰る名残りかな、東に帰る名残りかな。

五、清元 御名残押絵交張(鳥羽絵)

文政二年(一八一九)九月、三世中村歌右衛門が出した九変化舞踊の一つとして初演。二世榎田治助作詞、清沢万吉作曲。
鳥羽僧上の描いた漫画のうち、はだかの下男が鼠を追っかける、摺古木には羽根が生えて飛んで行くというのを舞踊化したもの。
はじめ軽快に、そして引く物尽しから早間な洒落た文句が

へそこらでどっこい引いて来る、頭の黒いどぶ鼠、へ楯で押さえりや、へチュウチュウチュウ、へちゅちゅらのちゅいとわねかえし、鳥羽絵の御無理や御尤もと、地口で逃げるおう鼠の、あとを慕うて、走り行く。

六、一中道 成 寺(上の巻)

一中節は、初代都一中が元禄(二六八八—一七〇三)のころ、京都で語り出した浄瑠璃の一流派で、現在は都、菅野、宇治の三派にわかれています。一中節は高雅、上品な語り口で、素朴さを身上としています。これは歌舞伎の舞台とは早くから分れたため、古い形を今日まで伝えているといわれています。

初代都一中の弟子に、富小路豊後掾というすぐれた人があって、そのまた弟子筋から、常磐津、富本、新内、宮内などが生れました。そのため一中節は、近世三味線音楽の一方の祖といわれております。
今日演奏される「道成寺」は、一中節宇治会の出演で、曲の作られたのは明治二十一年、三世宇治紫文齋の作曲といわれています。「道成寺」は、邦楽の各流派にそれぞれ名作が作られています。一中節にも都、菅野にもあります。作品としては、新しい時代になります。一中節宇治派の特色を十分に發揮した曲で、時間の都合で上の巻だけの演奏になります。味わい深い曲です。はんなりとした落ち着いた曲といえましょう。

へさてそののち、へ紀州道成寺には、さる仔細ありて、撞鐘退転す。このほど再興し鐘を鑄させて候ほどに、鐘の供養をいたたさばやと存じ候。いかに誰かある。鐘の供養の場へ、女人は固く禁制

続き、へなぜそのように「から鼠のクドキ。しかしこれはむしろ下女のクドキと取れぬこともない。あと投節があつて賑やかに終る。清元らしい粋な感覚にあふれており、文化文政時代の洒落た気分は、ちよつと他には見られない。踊りでも時々出るが、これは演奏で大きく方が楽しいように思う。

へしめたぞしめた、おつとどっこい、逃がしてなろか。おのれ鬻らば三味をかじらいで、戸棚飯つきあげくの果てにや、可愛い女房の鼻柱、それで憎さが枳落し、はっはっはっはっはっは、とこ万歳、見おれおかげで風邪ひいた。

へほかにひくものは何である、ちんりちんり跛に、へ船、金棒、へ酒があとひく女房がお茶ひく、夜鷹が眉ひく、畑じゃ大根、うつつい姐えの袖袂、ひく手あまたであるぞいな。

へはすみ南無三畜生め、摺古木取る間に、へちゅいつと逃げた。みよみよ、みよみよ、へねずみに起きて月見かな。

へああらあやし怪ししの十六文で、九官鳥は見たれども、摺古木に羽根が生えて、鳥羽絵はほんにわれながら、見るははじめて、おやおやおや、いでや捕えて友九にと、足をのばしつ手をあげろ、捕らんとすれば、

へ鳥はついで、飛んで逃げた、へええあつたらものえ、へ見送る後ろに、へ逃げたる鼠、振り向くとたん、へ見つけてうぬと駆け寄るを、へそのまま膝に飛びついて、

クドキへなぜそのように腹立てて、わたしを何ともさしつけに、いとも恥かしそもやまた、へ藁紙屑の巢を離れ、流しの下や膳棚で、いたずら習うた時分から、へふつと心で思いそめ、猫や鼯の目を忍び、どうぞ抱かれて鼠とは、へ及ばぬ恋の身の願い、へ知らぬお前の木枕を、せめてかじつて念晴らし、へそれにきこえぬ胴欲と、山椒のような目に涙、

へ泣いて食いつき嘆くにぞ、
へええ、畜生め。

へ可愛いお方のお声はせい、あがるお客の面憎や、悪洒落かねびら行き過ぎた、そばや按摩の声ばかり、へそのほかおでんに正月や、割竹金棒火の用心、夜明け鳥の四つ手駕籠、へはい、へかこ、へのかけ声に、旦那は中で空寝入り、落つこつた、これには困り入りやした。

にてあるぞ、その分心得候えや、心得候え。

へ作りし罪も消えぬべし、作りし罪も消えぬべし、鐘の供養に参らん。自らと申すは、そもよるべ定めぬ忍び妻、へ浪にただよう浮寝鳥、浮いつ沈みつようようと、紀の路の奥に住み馴れて、月を友、雪をしとねに眺むる花は、人の心を慰むる。へ白拍子の鼓草、鳴滝川の流れの身、道成寺の御寺には、鐘供養のある由を、皆人ごと夕間暮、月はほどなく入り汐の、へさしてわが身の罪科を、作らんことも風吹く、へ三室の山のもみじ葉は、色に染みにし仇衣、へうすからざりし三段の、罪恐ろしくことにはまた、へ罪業深き河竹の、一夜ばかりの手枕に、人の思いを身にうけて、長き闇路や黒髪、へ乱れ心の結ばれて、煙り満ちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ、日高の寺にぞ着きにける。

へやがて門前に立ち寄り、もの申さんとありければ、へ警固の法師何事にやと答うれば、へさん候、自らはこの国のかたわらに住みなれし白拍子、鐘の供養のおん場を、拝み申さんそのために、これまで来り候なり。へ法師どもきくよりも、志は殊勝なれども、女人はかたく禁制と、仰せ出だされたりければ、叶うまじとぞ申しける。

へ女性重ねて、鐘供養の御場を拜ませて給わらば、常々なれし舞の袖、面白う奏でつつ、この場うちの御いたつきをほらすべし、ひらにひらにと申しける。

へ法師どもこれをきき、所詮舞いもひとかなで、面白うこそ候わん、さいわいこれに烏帽子あり、これを召されて、面白う舞い給え、拝まさんとぞ申しける。

へ女性よろこび、さあらば一曲奏でんと、あれにまします宮人の、烏帽子をしばしかりに着て、扇おつとりいろいろの、すでに拍子をはじめけり。

二上りへ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、緑の空も暮れ初めて、鐘や哀れに響くらん。

本調子へ山寺の、春の夕暮れ来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。へさるほどに、遠寺の鐘に、月落ち鳥啼いて、霜雪天に満汐ほどなく日高の寺の、江村の漁火愁いに対して、人々眠ればよきひまぞと、立ち舞うように狙い寄つて、撞かんとせしが、思えばこの鐘うらめしやとて、竜頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引き被いてぞ失せにける。

七、常磐津積恋雪関扉（関の扉）下

天明四年（一七八四）十一月、江戸桐座の顔見世狂言「重
重入重小町桜」（じゅうにひとえ・こまちざくら）の大切淨
瑠璃として初演された。作者は劇神仙こと宝田寿葉。作曲者
は当時の豊後節の作曲の名人鳥羽屋里長と推定されている。
逢坂山の関を守る良岑宗貞の下で、天下を望む大伴黒主が
関守関兵衛となつて忍んでいる。宗貞とかねて恋仲だった小
町姫が尋ねて来て、宗貞と再会、互いに悲しい恋の思い出に
泣く。そして小町姫は関守関兵衛を怪しいと見て、味方に知
らせに行く。

以上が上の巻で、今日は時間の都合で下の巻のみの演奏。
関兵衛が酔つて出て宗貞にからみ、追ひ払うので、宗貞は心
を残して奥へ入る。残つた関兵衛が、天下調伏の護摩木にし
ようと、雪中に花咲く墨染桜を伐ろうとする。と、宗貞の弟
の安貞と契つた墨染桜の精が、傾城墨染となつてあらわれる。
そして関兵衛を相手に廓話のあと、関兵衛の本性を見現わし、
立廻りになるという場面。

古い顔見世物の常として、内容は荒唐無稽なものであるが、
それだけに大胆に筋を展開したおもしろさは、天明気分その
ままである。まだ自然と人間の生活が密接だった時代が感じ
られ、名曲としてたびたび上演され、今日に及んでいる。常
磐津の作品中でも、もっとも大曲といわれるばかりでなく、
淨瑠璃所作事の中でも一つの完成度を示す作で、筋の展開、
スケールの大きさ、音楽的な構成など、あらゆる面で最高傑
作といわれている。

へ今宵もすでに降りしきる。雪の翼の羽風をも、音静やかに更けて行く。
まさに先帝御亡き跡を、弔い奉る御夜の詠経。なおも同向を忘れもやら

に、盛りの色を山風が、来ては寝よとのかねことも、泊り定めぬ泡沫の、
水に散りしく流れの身。へ関守は心付き、
関兵衛へやあいずくともなく見なれぬ女、この山かげの関の扉へは、い
つの間にどこから来たのだ。
墨染へあい、私やあの撞木町から来やんした。
関兵衛へうむ、何しに来た。
墨染へ逢いたさに。
関兵衛へそりや誰に。
墨染へこなさんに。
関兵衛へなに俺に。そりや何故。
墨染へ色になつて下さんせ。
関兵衛へえ、何がどうしたと。
墨染へさあ、恥かしい事ながら、私や見ぬ恋にあこがれて、雪をいとわ
ずはるばると、ここまで来た程に、どうぞ色よい返事をして下さんせ。
関兵衛へこりやありがたいといたいが、どうも合点がいかぬわえ。
墨染へお前もまあ疑い深い、そこが歌にもいえる、桜咲く、桜の山の桜
花。
関兵衛へ咲く桜あり、散る桜あり。
墨染へ思ひおもいの人心じやわいなあ。
関兵衛へそうきけばありそいな事、時に太夫さん、お前のお名はえ。
墨染へ墨染といいやんす。
関兵衛へなに、墨染、あの桜の名も、もとは墨染。
墨染へええ。
関兵衛へはてえい名でござりまするの。それはともあれ、ついに俺はま
あ、女郎買いをしたことがないが、廓のかけひき、
墨染へなじみのしこなし、問夫狂い、実と、
関兵衛へ嘘との
墨染へ手管の諸わけ、
関兵衛へ裏茶屋入りの魂胆まで、
墨染へそんならここで話そかえ。
へ行くも帰るも忍ぶの乱れ、限り知られぬわが思い。へ月夜も闇もこの
廓へ、忍び頭巾で格子先、へ行きつ戻りつ立ちつくす、（中略）

ず、誦するも弟、安貞と心ばかりの手向草。

へ宗貞袖を取り出だし、おさりながら、血汐に染みしこの片袖、身に
添え持たば、先帝への恐れあり、如何はせんとあたりを見廻し、おそ
れよそれよとくだんの片袖、箆の下樋へ押し隠す。へその間に奥の間
より、へ一杯機嫌で関守は、銚子盃携えて、足もひよろひよろ歩み出で、
関兵衛へえい、世の中に、酒ほどの楽しみはないわいの。やあ、お前は
まだ寝ないか。えいや何故寝なさらぬよ。して、この花嫁御はどこへ行
た。はああ、きやつ床急ぎだな。ええ急ぐやつさ。これ、お前も行って
寝なよ。

へ寝ぬは損だばさらんだ。あれはさのえい、これはさのえいやと恋の測
もしもはまる気で四つ紅葉。

宗貞へなるほどわしは行つて寝ようが、そなたはきつい酔いようじや、
ああ危ないぞやあぶないぞやと、いざま入れる懐の、手先を押さえて、
関兵衛へああこりや何をするえ、俺が懐へ手を入れて、ど、どうするの
だ。

宗貞へさあこれは、

関兵衛へいやさ、どうするのだよ。ええきこえた、かみがないというこ
とか。神も末社もうち連れて、めでた目出度の若松さまよ、枝も栄えて
葉も茂る、おめでたや。千代の子おめでたや、千秋万歳、万歳万歳、万
万歳、はああ、

へいざせ給えと押しやられ、へ始終を胸に宗貞は、心残して奥へ入る。

へあとは手酌の一人酒。ああさぞ今頃は、しげれ松山、えいやえい気味
だぞ。こりや命をかきむしるわえ。どれもう一杯。酒にうつろう星の影
関兵衛へこの盃中に鎮星の、きらめく影は寅の一点、今宵今宵三百年に
あまる、この桜を伐つて護摩木となし、班足太子の塚の神を祭る時は、
大願成就心のまま、この斧をもってたちどころに、どれ。
へかしこの石に斧の刃を、押しあておしあて磨ぎ立つる。

へ昔はそうそう、とうとうと、闇を照らせる金色は、玉散るばかり物凄
き。（中略）

へ幻か深雪に積る桜影、げに朝には雲となり、夕べにはまた雨となる、
巫山の昔、目のあたり、墨染が立ち姿。二上りへ仇し仇なる名にこそ立
つれ、花の蕾のいとけなき禿立ちから廓の里へ、根こじて植えて春ごと

三下りへ往のうやれ、わが故郷へ帰ろやれ。へ立ち舞ううちに落ちたる
袖、これはと墨染取り上げて、抱き締めつ身に添えつ、ゆかしき夫の形
見やと、人目も恥ぢず泣きければ、
関兵衛へや、そなたは何を泣くのじや。へさあこれはお前それ。こ
の片袖は、よその女中さんから書いてよこさしやんした起請じやの。
関兵衛へいえいえ起請でござんしよう。
関兵衛へお前ほど、起請じや。
墨染へええお前はなあ。
クドキへこれこのように初めから起請誓紙を取り交し、深いお方があり
ながら、隠しておいてまたわしに、色で逢うとはようもよう、騙さんし
たが憎らしい。へそうとも知らず慕い来て、見ればはかなや片袖の、血
汐の文字は亡き跡の、形見と思えばいとどなお。へこれなつかしい悲し
いと、言葉に色は含めども、心の劍穂にあらわれ、立ち寄る女を、へは
つたと睨めつけ、
関兵衛へ最前よりこの片袖に、心をかくる怪しき女、様子を明かせ、な
んとおんと。
墨染へお前この片袖は夫の血汐、そのみならず、最前わが業通にて手
に入れし、勘合の印を所持なすからは、様子があろう。本名明かせ、な
んとおんじや。
関兵衛へかくなる上は何をか包まん。われこそは中納言家持が嫡孫、天
下を望む大伴の黒主とは俺のことだわやい。
墨染へさてこそ。
関兵衛へわれに恨みをなさんとする、そもまず汝は何者じや。（中略）
墨染へわが本性の桜木を、邪慳の斧にかかりしぞや、報いの程を思い知
れと、あり合う桜を呵責の筈、はつたと睨む有様を、へやあ小瓶など無
二無三、へ斧取り直して打ちかくれど、凡人ならぬ精霊の、業通自在の
身も軽く、ひらりひらひらひら、へ飛び交う姿は吹雪の桜、霞がくれや
臙夜の、水の月影手にも取られず、へ見えみ見えすまたあらわれて、
今ぞすなわち人界の、輪廻を離れ根にかえる、しるしを見よという声は
かり、形は消えて桜木に、春もかくやと帰り花、雪を踏みわけ踏みしだ
き、水に戻れば墨染の、小町桜と世にひろき、あまねく筆に書き残す。

八、長唄廊くろわ

丹たん

前ぜん（廓花柳立髪くろわはなをたてがみ）

安政四年（一八五七）五月、初代花柳寿輔の踊りのお凜いの会に初演されたもので、作詞者不明、三世杵屋勝三郎作曲、江戸時代の吉原といえは、今日とちがって文人、通人たちが集まる一種の社交場、文化サロンのな色彩もあった。廓のことを語るの、通であり、そこでの風俗は流行の源でもあった。したがって、三味線音楽に吉原のことが出てくるのは当然であり、それをいかに巧みに表現するかということが、技量の見せどころでもあったわけである。

この長唄曲は、華やかさのあふれた元禄の気分を描いたものだが、実際は幕末の廓の風俗がよくあらわされている。伊達男の丹前姿の廓通いから、春の吉原、土手節、傾城のグドキと続く。獅子の狂いから木遣りになるのは、吉原俄のありさまで、泰平の世の廓が、実に見事にあらわされている。

へ俳優の、昔を今に写し絵や、及ばぬ筆に菱川の、寛濶出立廓通い、姿

いろどる丹前は、今日を晴れなる初舞台。

二上りへよしや男と名に高き、富士の白柄まばゆくも、紫匂う筑波根の、腰巻羽織六法に、振ってふり込む、やっこのこの、酒ならねじきり、

いろ上戸、恋の取持してこいまかせろ、しよんがえ、花にもまさる伊達な風俗。へそもや廓のはじまりは、遠つ元和の四つの年、庄司ながし弥宜町へ、五つの巷開きてより、揚屋の数も大門に、三千楼の色競べ、

へまず初春の飾り夜具、蓬萊山とゆうまぐれ、千本の桜仲の町、かざす扇の目せき笠、こいよねいと一声を、へほぞんかけたるほととぎす、お供帰りの酒機嫌、うたう小唄の土手節に、

へかかる山谷の草深けれど、君が住家と思えばよしや、玉の台もおろかでござる、よその見る日もいとわぬ我じゃよ、お笑いやるな名の立つに、姿見返る葉柳の、へ結んで解いた雲の帯、かけし屏風の雀形、比翼枕の

晩に、かささぎ渡す天の川、星待合の辻うら茶屋に、七夕さんのころび寝も、きぬぎぬ早き草の市、へ軒端を照らす花燈籠、その八朔の白がさね、雪の素顔に鉢巻しゃんと、月に仁和賀の勢い獅子。

へやあしめろやれ、しめて寝た夜は枕が邪魔よ、可愛い可愛い相槌の音、よいよいよいやな、えいえいやな。やれこれこれは手がそれたか、いとしけりやこそ、おいどをちつくり叩いた。よいよいよいやな、よいとな、やあしめろやれ、よいよいよい、これわのさ、そっこでしめる中綱。へよく咲き揃う花紅葉、秋葉祭の冬の来て、門に松竹年の門、大晦日の大神楽、狐で浮かせ、浮かれ浮かるる浮き拍子。へげに全盛は闇の夜も、吉原ばかり月と花、柳の廓ことぶきて、めでたく揚屋へ入りにける。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありましたですが、お許しを願ひまして、どうぞごゆつくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしようとして、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変わぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月七日（日）に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がきまりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おとところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございます。